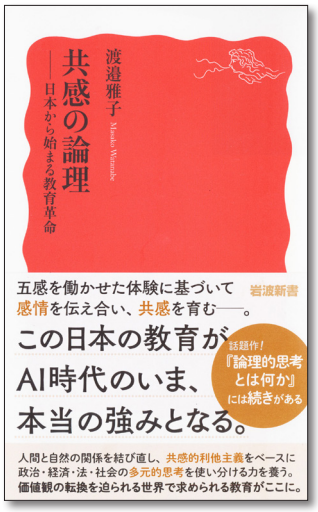


『共感の論理』
~日本から始まる教育革命

渡邉 雅子 著

岩波書店（岩波新書）
2025/09　206p　990 円（税込）

はじめに——社会と教育の大転換
序章　近代の矛盾とポスト近代の価値観
第１章　四つの教育原理——教育文化のモデル
第２章　共感の論理——社会原理の日本の教育
第３章　教育のグランドデザイン——利他と多元的思考を育む
終章　日本から始まる新しい秩序——利他と多元的思考が拓く未来

【イントロダクション】
気候変動に伴う自然災害や戦争、経済格差といったグローバルな社会課題が深刻化している。これらは近代化の矛盾と捉えることもできるが、日本は、その矛盾を克服する価値観を、学校教育を通じて長く継承してきたという。自然を「搾取する対象」と考えず、「自然の一部としての人間」と認識する価値観だ。本書は、近代化の矛盾や問題を指摘するとともに、それらを解決する「ポスト近代」の価値観を示す。ポスト近代には、経済、政治、法技術、社会の四つの領域のうち、近代に主だった経済領域ではなく、社会領域の原理が主になる必要があるという。そして、ポスト近代に求められる価値観は、日本の学校で教えられてきた「共感」の論理によって育てることができるとする。さらに、社会原理に基づく「共感的利他主義」が、脱近代化の鍵になると説く。著者は名古屋大学名誉教授。コロンビア大学大学院博士課程修了。博士（社会学）。著書に『論理的思考とは何か』（岩波新書）などがある。

●経済領域が積み上げた矛盾や問題を、社会領域で解決

21 世紀に入り、世界は地球規模の危機に直面しているとの認識が広く共有されている。加速的に進む生態系の破壊と気候変動に伴う自然災害は、人類の生存に不可欠な水、食料、エネルギーの確保を危うくしている。グローバル資本主義のもと、地球規模の分業体制に組み入れられた多くの途上国の人々は、「労働力」として搾取され、自立を困難にする貧困と格差社会から抜け出せずにいる。先進国でも経済格差の拡大が進み、こうした状況は世界全体の秩序だけでなく、各社会の内部秩序も不安定にさせている。（2p）

これらの問題を「近代化の矛盾」として捉えると、問題の本質はよりすっきり見えてくる。近代を牽引したのは、資本主義、科学主義、民主主義、国家主義という、いずれも西洋に起源を持つ四つの原理だった。その中でも、中心的な原理となったのは資本主義である。（3p）

近代の成り立ちを歴史の大きな流れの中で捉えると、かつては宗教があらゆる領域を支配していたが、やがて「世俗化」が進み、宗教からまず政治が切り離され、次に法と科学が分離し、最後に経済が宗教と道徳から解放されて、それぞれが独立した機能を果たすようになった。フランス革命は、約 500 年にわたって進められてきた宗教からの諸領域の機能的分離を一気に加速させ、「近代」への扉を大きく開いた。（4p）

資本主義という経済領域（経済合理性）が支配的な原理となって規範や政治、社会領

域にまで浸透した時、自然は資源として人間が利用し搾取する対象になってしまった。自然破壊と格差の問題の根は、この自然観の変化にあると現代の研究は指摘するのである。（14p）したがって、この自然観を見直し、新たな価値観へと転換することが次のパラダイムへの扉を開く鍵となる。（3p）

ポスト近代においては、「社会領域」の原理が主になることで、近代の経済領域が積み上げた矛盾や問題の解決が図られると期待できる。その中心になるのが、近代の自然と人間の関係を見直して「自然の一部としての人間」へと認識を変えること、そしてそこから必然的に導かれる「利他主義」へと転換することである。（46p）

●経済、政治、法技術、社会という四領域の教育原理

ではポスト近代の中心となるこれらの価値観は、いかにして教育によって育てることができるのだろうか。（46p）

教育目的で対比的に論じられるのは、目的が何らかの「技術」の獲得を目指すのか、それとも「価値」の獲得を目指すのかである。他方、教育の手段として二項対立的に論じられるのは、目的達成のために教えられる知識が、「経験的知識」を重視するのか「体系的知識」なのかである。（59p）これらの教育目的とその手段の二項対立を組み合わせた四分割表に、世界の主な教育理論を配置。（65p）各象限の理論に共通して現れる原理を示した。（69p）
※本 PDF 4 ページ目の「教育文化のモデル（教育原理の四類型）」参照

・経済原理（効率性の追求――労働者・生産者の育成）（アメリカ）
経済原理の教育の目的は、経済活動を支える人材の育成にある。そのため、教育目的・内容・方法は、経済合理性――計算に基づいた最も効率的に目的を達成する手段の選択――によって合理化される。（70p）

・政治原理（公共の利益の追求――市民の育成）（フランス）
教育の目的は、自律した政治的主体としての市民の育成にある。公共の利益を考え政治参加するために、個人よりも集団を優先させる価値観の継承を行う。共通善について熟考し、議論し決定する「手続き」を教え、既存の法律を評価して変えられる知識と技能および思考法を身につけさせる。（70p）

・法技術原理（摂理と規範の伝授――求道者・遵法者の育成）（イラン）
教育の目的は、宗教的、思想的、科学的に確立した「真理」を「規範」として伝えることである。真理を伝える原典の体系的な知識が、学校を含む社会生活全般を覆う絶対的な知識として伝授される。（71p）

・社会原理（共感による連帯――共同体の構成員の育成）（日本）
教育の目的は、他者および自己とのコミュニケーションを通じて社会秩序を成り立たせる道徳心を「自己形成」の一環として養うことである。イデオロギーや理論にとらわれず、「状況に埋め込まれた活動」を学習方法として、対人的な相互作用と内省により体験を意味づける。（72p）政治原理の教育が価値の達成のために理性を手段とするのに対して、社会原理は共感と内省を手段とする。

四原理のもとになる四つの領域――経済、政治、法技術、社会――は、どの社会にも存在し、社会を成り立たせるために必要不可欠なものである。しかし、どの領域が主流の文化として選択されるかにより、当該社会／国の教育の原理が決まると考えられる。（73p）

●社会原理に基づく「共感的な利他主義」が求められる

地球規模で相互依存が進み国や社会が互いに影響し合う現代では、「自由」と「個人の権利」の名のもとに収奪と格差を生む「利己主義」を許すことがもはやできないものとなりつつある。その結果、「利他主義」への価値転換の必要性が広く世界に認識され

るようになった。しかしいざ世界で議論が始まると、一口に「利他主義」といってもその捉え方には複数の立場があることが明らかになった。（95p）

フランスの著名な思想家のジャック・アタリの利他主義は、「合理的利他主義」と呼ばれることが多い。それは、自己利益を利他の行為の動機にしていること、そして利他主義を課題解決のための合理的な手段として考えているからである。その一方で彼の利他主義が「理性的利他主義」でもあるのは、利他の具体的行為として、世界に共通の法の整備や社会政策、国際機関の設置を提案しているからである。（97p）本書で提示した教育文化の類型の中では「政治原理」に該当する。

政治原理とは異なる利他のアプローチとして、哲学者のピーター・シンガーらが提唱した「効果的利他主義」がある。これは、開発途上国への援助において寄付の効率性を重視する立場である。その原理においては効率性と費用対効果の最大化を目的としており、「経済原理」に基づく利他主義と位置づけることができる。（98p）

もう一つの利他主義の形は、宗教の教義や法律によって定められた義務として行われる「喜捨」「施し」であり、「法・原理的利他主義」と呼ぶことができる。教育文化の類型では「法技術原理」に基づく利他主義に分類できる。

では、社会原理に基づく利他主義とはどのようなものか。それは共感に基づく利他主義である。誰かが苦しんだり悲しんだりしているのを見た時、その人の状況に身を置き、自分ごととして苦しみや悲しみを感じて手を差し伸べる。（99p）日常における他者との経験の積み重ねを通して、その時々の状況を捉えながら、私欲をとりはらって相手が何を望んでいるのかを瞬時に感じ取る、共感による利他である。

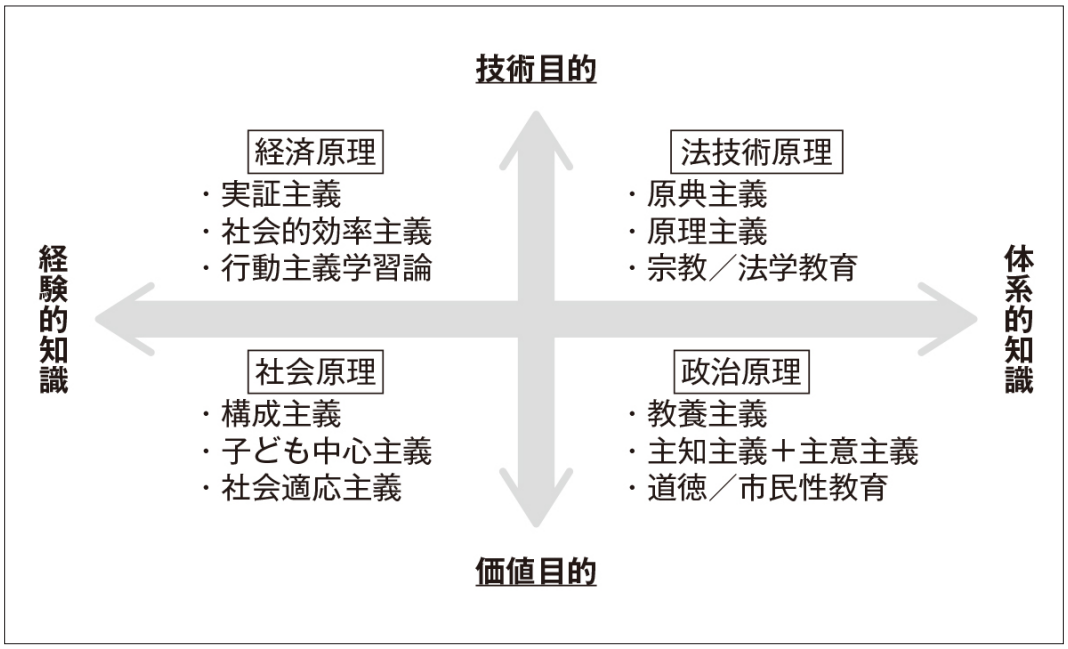
共感に基づくこの態度を社会で生きていく上のしつけとして、倫理として育んでいるのが日本の学校教育である。共感を育む教育は、国語の読解方法の中に、そして綴方の伝統を受け継いだ感想文の中にある。それどころか、毎年大学の共通入学試験で必ず出題される「主人公の心情をたずねる」国語の問題の中にも見つけることができるのである。（100p）

共感の強みは、（＊江戸時代の石田梅岩を祖とする）心学のいう「万人の中にある人間性（仏性）」と科学が証明した「人間が種として脳内にもつミラーニューロン」を利他の根拠にするため、宗教やイデオロギーなどの違いによる「和解し難い不和」から解放されていることである。特定の価値観の基準から自由（価値フリー）である。相手を思いやる利他の行為そのものに価値が置かれる。（103p）

近代を牽引してきた戦略・計算・理性中心の価値観とは異なる、新たな価値観として「共感的な利他主義」が今、求められている。人類がこれからも生き延びるためには、人間が本来持っている「共感」という貴重な能力を再発見し、自然との関係を回復することが不可欠である。（108p）

※「＊」がついた注および補足はダイジェスト作成者によるもの

コメント：日本の国語教育では、物語の読解で、人だけでなく動物や植物、モノになりきる方法が用いられるが、著者はこれを、世界からみてかなり特殊だと指摘する。自然を人間が支配するものとは考えず、人間も自然の一部とする自然観が、学校教育を通じて育まれていることに改めて気づかされる。日本では、本を乱暴に扱う子どもに「本が泣いているよ」と語りかけるなど、「共感」を育む声掛けや教育はごく当たり前に、あらゆるところで行われている。その特殊性と価値を自覚し、意識的に継承していくことが大切なのだろう。

※本ダイジェストは著作権者からの許諾に基づき、書籍本文を再構成して作成しています。
※本ダイジェストをユーザーご自身でのご利用以外で許可なく複製、転載、配布、掲載、二次利用等行うことはお断りしております。

【教育文化のモデル（教育原理の四類型）】